財団法人滋賀県文化財保護協会
埋蔵文化財整理調査成果報告会 あの遺跡は今！ part 10

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。
財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage

「祈りと願いの考古学」

－報告会資料・展示解説－

＜目　次＞

【報告会資料】

水辺の祭祀
－日野町番場遺跡出土の祭祀土器－

最古級の三間社流造の神社遺構
－東近江市金貝遺跡－

「金剛般若波羅蜜経」のこけら経が出土
－高島市天神畑遺跡
全国初　「見せ消ち」による誤字の修正例－

【展示解説】

湖底で見つかった土器棺墓 －志那湖底遺跡－
独鈷石 －針江浜遺跡－
土　馬 －関津遺跡－
塩津港遺跡のこけら経
滋賀県内出土のこけら経

高島市天神畑遺跡出土こけら経

日　時：平成22年2月21日（日）
場　所：滋賀県立安土城考古博物館内
（整理作業公開）　9：00～17：00（整理室・整図室）
（成果報告会）　13：00～15：15（2階セミナールーム）

当資料集を博物館チケット売り場で提示していただくと、当日に限り団体料金で企画展示・常設展示をご覧いただけます。また、チケット半券とともに提示していただくと展示室への再入場ができます。

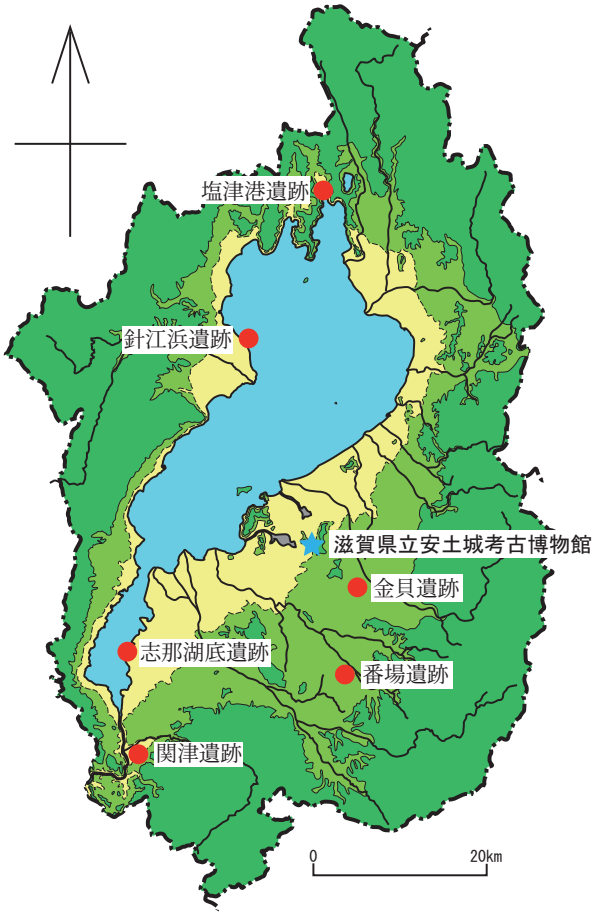
整理調査成果報告会について

財団法人滋賀県文化財保護協会では、滋賀県教育委員会等からの依頼により、県内各地で埋蔵文化財の発掘・整理調査を行っています。発掘調査で得られた情報は「現地説明会」や「新聞発表」などを通じていち早く公表しています。

また、滋賀県立安土城考古博物館内の調査整理課では、整理調査の成果についてより深くご理解をいただけるように、整理調査報告会「あの遺跡は今！」シリーズを平成 17 年度から毎年 2 回実施しています。「あの遺跡は今！」では、新たな資料を積極的に公開・展示するとともに、出土品に直接触れていただく整理作業体験やレプリカ等の製作、さらに整理作業の実体験や出土品を行っています。

今回は、メインテーマを『祈りと願いの考古学』とし、関連遺跡の調査報告会と展示を企画しました。また、高島市天神畑遺跡出土の「こけら経」に関連して県内出土の主な「こけら経」を特別展示しました。

この企画が、滋賀の歴史を体感し、文化財への親しみをお持ちいただくきっかけになれば幸いです。



◆今回の報告会・展示に関連する主な遺跡の位置

◆平成21年度に調査整理課で整理調査を実施している遺跡

遺　跡　名	所　在　地	調査原因	主な時代
榿木原遺跡	大津市	国道改修	古代
粟津湖底遺跡	大津市	琵琶湖総合開発	縄文
関津遺跡	大津市	ほ場整備	後期旧石器～近世
志那湖底遺跡	草津市	琵琶湖総合開発	縄文～古代
七条浦遺跡	草津市	琵琶湖総合開発	縄文～古代
北萱遺跡	草津市	琵琶湖総合開発	縄文～中世
番場遺跡	日野町	県道建設	古墳
松原内湖遺跡	彦根市	下水道関連	縄文・古墳・古代
肥田城遺跡	彦根市	ほ場整備	古墳～中世
金貝遺跡	東近江市	ほ場整備	古代・中世
金貝遺跡	東近江市	河川改修	古代・中世
小野寺遺跡	長浜市	砂防	古墳・中世・近現代
塩津港遺跡	長浜市	河川改修	古代～近世
極楽寺遺跡	高島市	県道建設	古墳・古代
上御殿・天神畑遺跡	高島市	河川改修	縄文～中世
西万木遺跡	高島市	店舗建設	中世
針江浜遺跡	高島市	琵琶湖総合開発	弥生

関連年表

時代			主な出来事
縄文時代		約 6000 年前	
			志那湖底遺跡の土器棺墓
弥生時代		約 2500 年前	稲作始まる。
			針江浜遺跡の独鈷石
	3 世紀	248 年頃	卑弥呼死す。
古墳時代	4 世紀		前方後円墳が各地にさかんに築造される。
	5 世紀		番場遺跡の祭祀土器
	6 世紀		群集墳が盛行する。
	7 世紀	603 年	冠位十二階制の制定。
飛鳥時代		604 年	憲法十七条の制定。
		645 年	大化の改新（乙巳の変）。
		667 年	近江大津宮へ遷都。
		694 年	藤原京に遷都。
奈良時代	8 世紀	710 年	平城京へ遷都。
		742 年	紫香楽に離宮を造る。
		784 年	長岡京へ遷都。
		794 年	平安京へ遷都。
			関津遺跡の土馬
平安時代	9 世紀		このころ金貝遺跡の神社が造られる
	10 世紀		
	11 世紀		
	12 世紀	1192 年	源頼朝が征夷大将軍となる。
鎌倉時代	13 世紀		
	14 世紀		
室町時代		1336 年	室町幕府成立。
	15 世紀		
			天神畑遺跡のこけら経
	16 世紀	1573 年	足利義昭追放（室町幕府滅亡）。
安土・桃山時代		1576 年	安土城完成。
		1582 年	本能寺の変。
		1600 年	関ヶ原の戦。
	17 世紀		
江戸時代			塩津港遺跡のこけら経

水辺の祭祀（さいし）

―日野町番場（ばんば）遺跡出土の祭祀土器―

１．はじめに

「古墳時代」と言うと、古墳での祭りが真っ先に思い浮かぶことでしょう。しかしながら、祭り・祭祀には様々な様態・目的・行為などがあります。日野町番場遺跡の平成 20 年度の発掘調査では、古墳時代中期（５世紀後半）の「水辺の祭祀」と呼ばれる祭りに用いられた土器類や関連する木製品などが出土しています。そこで、今回は、ムラとの関連も視野に入れながら、番場遺跡での「水辺の祭祀」について考えます。

２．位置と環境

番場遺跡は、滋賀県を４つの地域に分けた場合は湖東地域に含まれます。古代には天皇の薬猟場として「蒲生野（がもうの）」と呼ばれた地域の南部にあたり、鈴鹿山脈を水源とする日野川が形成した低位段丘上にあります。遺跡がある「三十坪（みそつ）」は、日野川とその支流である出雲川が合流する地点であり、その地名は古代の条里で七条二里三十坪にあたることに由来しているようです。今回調査地の北西約 200m に位置する八千鉾（やちほこ）神社は、三十坪村の出郷である増田（ましだ）村の鎮守でもあります。

日野川流域には、４世紀中頃には雪野山古墳（東近江市・近江八幡市・竜王町）、５世紀代には木村古墳群（東近江市）・千僧供（せんぞく）古墳群（近江八幡市）が築かれるなど、湖東の中でも中核的な地域です。番場遺跡は、まさにこの時期の集落遺跡として知られている遺跡です。

遺跡の東方には、東海道土山宿（甲賀市土山町）と中山道小幡（おばた）（東近江市五個荘町）とを結ぶ「御代参（ごだいさん）街道」が通っています。土山から南東へ進むと伊賀・伊勢へと繋がる道筋でもあり、湖北地域や北陸地方と伊勢湾岸地域や東海地方とを繋ぐ重要なルートです。

番場遺跡の周辺には、集落遺跡として、弥生時代中期後葉・古墳時代後期・平安時代～鎌倉時代初頭の３時期の集落が営まれた内池（うちいけ）遺跡、古墳時代・平安時代末～鎌倉時代初頭の十禅師（じゅうぜんじ）遺跡、弥生時代～中世の宮ノ前（みやのまえ）遺跡が

図１　番場遺跡の位置

図２　番場遺跡周辺遺跡位置図

あります。

また、埴輪のある前方後円墳と考えられている日枝社古墳、古墳時代後期（６世紀末～７世紀初頭）に築かれた小御門（こみかど）古墳群があります。

３．発掘調査の概要

4,000 ㎡を対象とした発掘調査は、地形により大きく南北２つの調査区に分けられ、それぞれ時代・性格の異なる遺構・遺物を確認しました。

北区では、古墳時代中期（５世紀後半）の南北方向に延びる旧流路と同時期の落ち込み、中世の旧流路を検出しました。古墳時代中期の流路と落ち込みからは、手捏（てづくね）土器や小型土器類などの祭祀土器や外面に炭化物が付着したほぼ完形の甕などの土器類と共に、漆塗りの竪櫛（たてぐし）・農具などの木器類、さらには建材の一部と考えられる木製網代（あじろ）が出土しました。

南区からは、現在の水田区画と同じ方向に延びる中世～近世の溝や土坑などを確認しましたが、北区と比較すると遺物はあまり出土していません。

写真１
北区で検出した古墳時代中期頃の旧流路

写真２
南区で検出した中世の水田に伴う溝

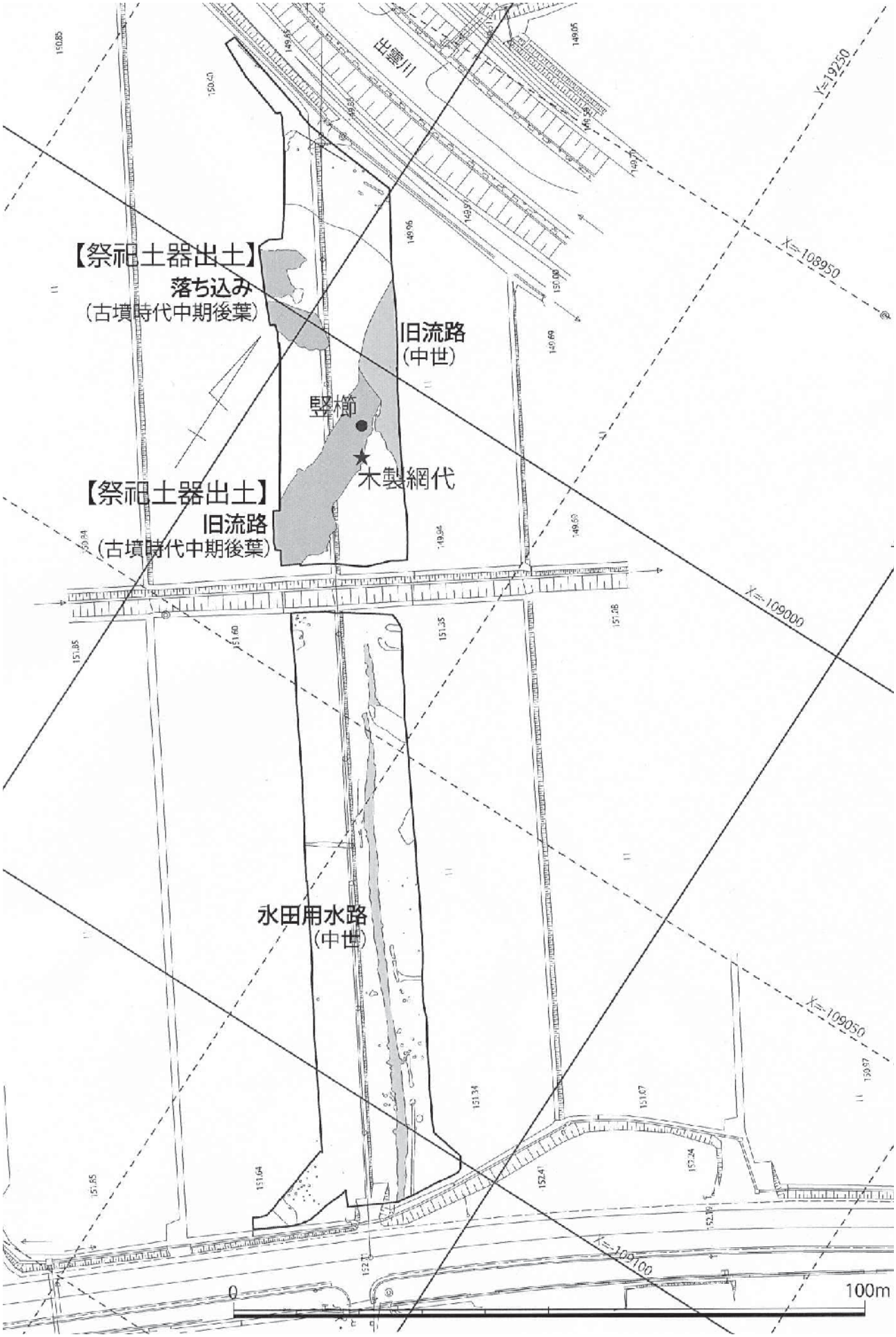


図3　番場遺跡遺構全体図

４.「まつり」の道具

いわゆる「祭祀土器」とは、まつりの中で使われた土器類であり、まつりのための土器・道具です。そのため、日常生活と同じ形の甕や壺、あるいは日常生活で使っていた甕や壺をまつりの道具として使用する際には、わざと底部や体部に穴を開けて非日常性を付与しています。

では、番場遺跡から出土した祭祀土器にはどのようなものがあるのか、詳しく見ていきましょう。

まず、小型の手捏土器です。小さいものでは高さ２～３㎝程度、大きくても高さ５～６㎝程度のもので、いわゆる小型丸底壺や小型鉢とは異なります。手捏土器は、子供が作ったように不整形で、調整もほとんどされず粘土の継ぎ目もそのままのような粗雑な作りのものが多く見られ、28 点出土しています。

次に、形や作りがしっかりした小型の丸底壺・鉢・高坏です。その系譜は弥生時代後期終末に遡り、古墳時代初頭には他の土器の胎土とは異なる極めの細かい精良な胎土を用いて作られていることから、特に「精製小型三種」として区別し、日常品ではなく祭祀用の土器として位置付けています。このような精製品は見られませんし、かなり不整形なものも多く見られますが、丸底壺が 17 点、鉢が９点、高坏が３点出土しています。

これらの小型の土器類は、サイズ的にも作りとしても、日常生活の中で通常に用いるのに適した容器・道具類ではありません。したがって、「祭祀」のために作られた、祭祀の中で機能する土器として評価されるのです。

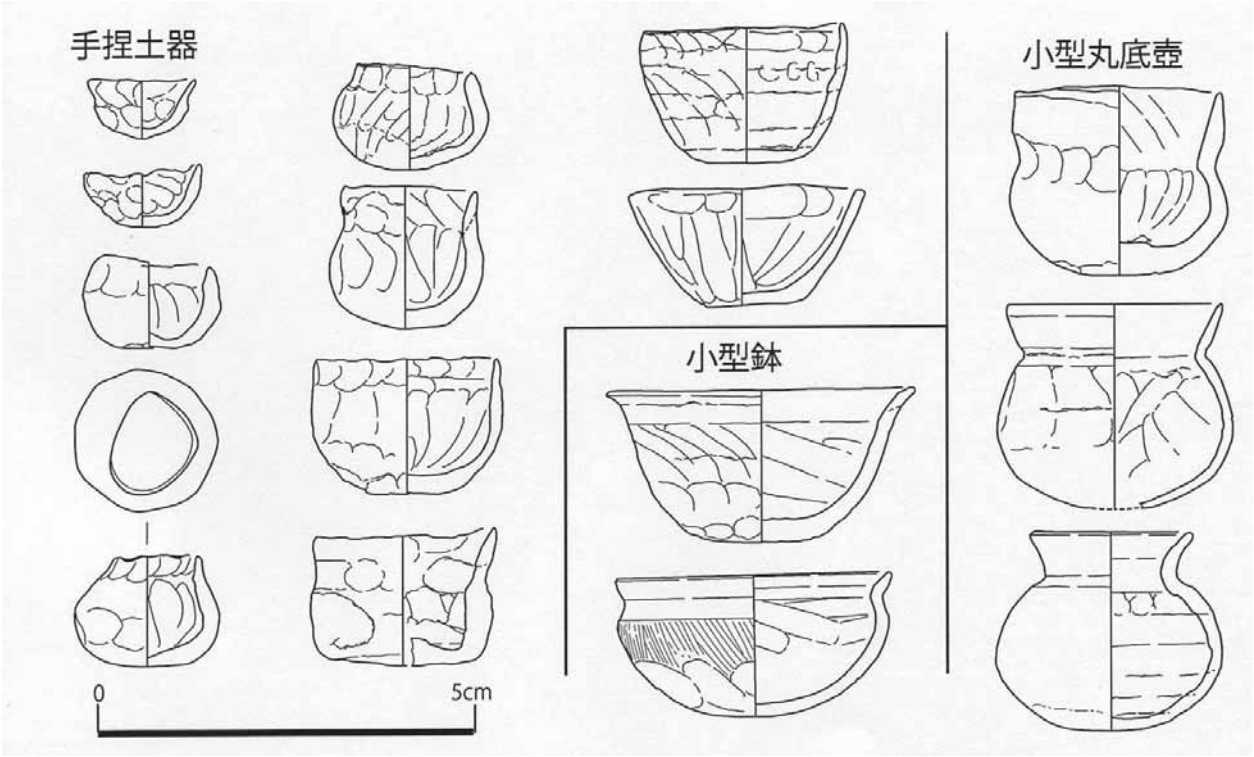


図４　祭祀土器（1）　手捏土器・小型鉢・小型丸底土器

数量的に最も多く出土しているのが、63 個体以上となる通常の甕で、その次が 36 個体以上となる高坏です。甕と高坏は、集落・住居内から出土するものと異なる特徴は無く、ほんとんど甕の中には使用の痕跡である炭化物が内外面に付着しています。したがって、この点においては、集落の日常生活に伴う道具が廃棄されたものなのか、祭祀に伴う道具として煮炊きに使われたのかは、即断することはできません。そこで、出土状況を見ると、破片がバラバラにはならず、その場で押し潰されたような状態になっていました。したがって、多くの個体がほぼ完形に接合・復元することができました。また、他の日常雑器類とではなく、祭祀用の土器類と共にその場にうち捨てられたかのような状態で出土することから、日常生活の中での廃棄よりも、祭祀に伴う行為に関連する道具とみることができます。

高坏は食べ物を盛る器、11 個体以上が出土しています。小型丸底壺を大きくしたような直口壺は液体を入れて注ぐ容器です。この用途は、日常の食生活の中での在り方と同様ですので、これらの土器類は食器となります。実際に、この場で食事をしたこれらの容器に食べ物を盛り、入れて供え物としたとも考えることができます。前者の場合、神であれ、ムラ人同士、首長同士であれ、「共飲共食」することで互いに絆や約束事を結び、確認したのだと考えられます。

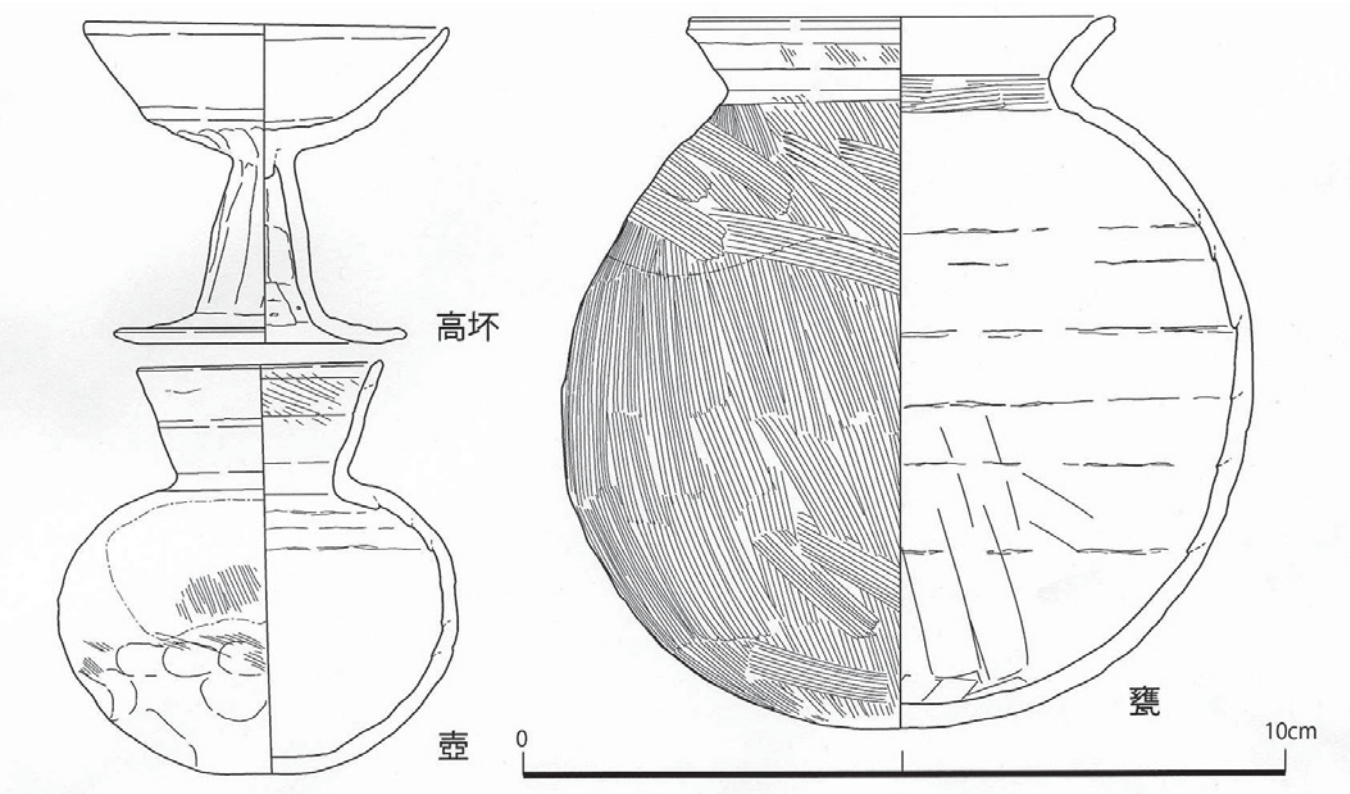


図 5　祭祀土器（2）　高杯・壺・甕

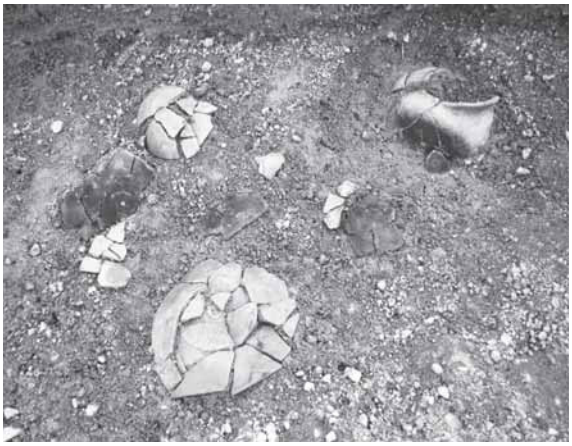


写真３　祭祀土器の出土状況－落ち込み（1）

写真４　祭祀土器の出土状況－落ち込み（2）

写真５　番場遺跡出土の祭祀土器
左から甕・壺・高杯、右手前３点が手捏土器。

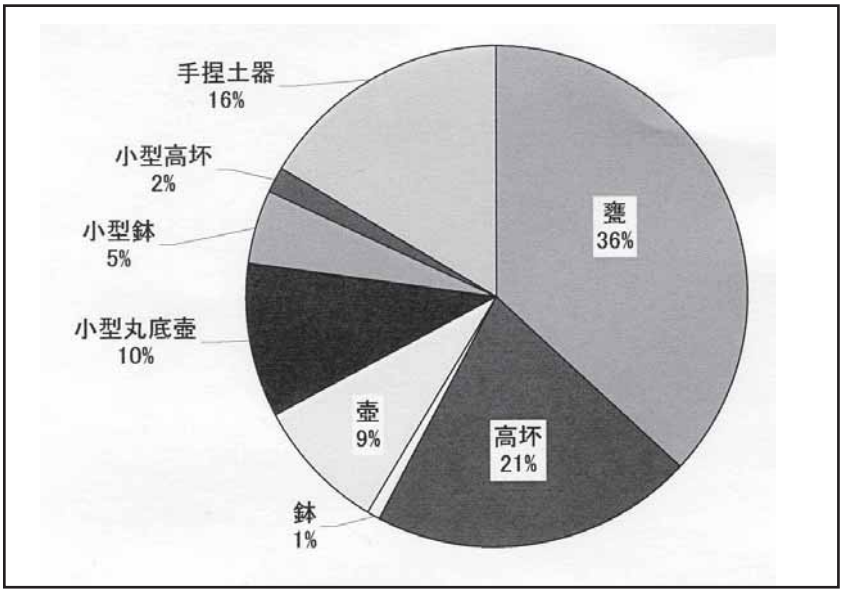


図６　祭祀土器の内訳

５.「まつり」の舞台としての水辺

前節で見たように、今回の発掘調査で出土した土器類は、祭祀の中で行われる場面を構成する、あるいは使われたまつりの道具であることは明らかです。では、この祭祀土器がどんな場所で使われたのかを再度確認しておきましょう。

祭祀土器が出土したのは、北区の旧流路とこれに隣接する落ち込みです。落ち込みでは、その場で押し潰されたような状態で出土していることから、その場に置き去られたままであるとみるのが自然です。一方、旧流路では、岸辺付近に比較的集中する傾向はありますが、水流によって動いた可能性も考えられます。しかし、磨滅が少ないことなどから、はるか上流から流されてきたとも考えにくく、やはり近辺の岸辺で行われたまつりに使われたものと考えられます。

これまでの調査・研究例からも、数多くの手捏土器や小型土器類が川・湖に限らず水辺から出土することが知られており、今回の番場遺跡での状況もこれに該当します。では、この水辺での祭祀、つまり祭りの舞台として水辺にはどのような意味があるのでしょうか。水には、永遠・永続性や豊かな生命力・生産力、あるいは清浄・誓いなど、数多くの意味合いがあるとされ、古代の人々は様々な場面で水に祈りと願いをささげたのでしょう。

６．誰が願ったのか？

では、番場遺跡では、誰が水辺でまつりを行ったのでしょうか？この問いを考えるためには、番場遺跡がどのような集落・ムラであったのかを考える必要があります。残念ながら、今回の調査では集落の中心部分を解明できていないので、推測の域を出ませんが、少ないながらも手がかりはあります。

まず、伊勢湾沿岸地域に特有な台付き甕があります。これは伊勢湾沿岸地域から番場遺跡まで運び込まれたと考えられる土器です。さらに、小片ではありますが、朝鮮半島の影響を受けた韓式系土器と呼ばれる土器も出土しています。これは、渡来系集団との関わりが想定される土器です。このことから、番場遺跡に居住した人々は、人・モノの交流の中にあったことがうかがえます。さらに、高い土木技術を持ち、当該期をはじめとする古代の土地開発に関係していたとされる渡来系集団との接点があった可能性も十分考えられます。

つぎに、網代に注目してみましょう。同時代の家形埴輪に木製網代が表現された例があり、建築部材として用いられたことが分かります。家形埴輪は首長の居館（きょかん）を表現していると考える説もあることから考えると、網代を用いるような建物は、単なるムラ長ではなく地域首長クラスなどの有力者の居館であるとみることもできます。そうなると、網代が出土した番場遺跡の近くに、こうした首長の居館が存在した可能性も出てくるのです。そこで行われたまつりは、一つのムラを超えたものかも知れませんし、地域のまつりとムラのまつりとの別があったことも想像できます。

考古学的に、それを実証することは極めて難しいと言わざるを得ませんが、日野川流域の平野部でも最深部に近い番場遺跡の地域の特性や歴史性を踏まえてこの水辺の祭祀を見直すと、新たな視点が開けてくるように思われます。

最古級の三間社流造の神社遺構

ー東近江市金貝遺跡ー

1．金貝遺跡の位置と周辺の遺跡

金貝遺跡は東近江市（旧八日市市）野村町に所在します。遺跡一帯は、愛知川によって形成された扇状地の扇央部にあたり、礫がちな土壌である上に、地下水脈が最も低くなるため、非常に水が得にくい土地です。

発掘調査では、奈良時代から平安時代を中心とする遺構・遺物を確認しました。

周辺には、野村北（のむらきた）遺跡、野村（のむら）遺跡、陣屋（じんや）遺跡、小山（おやま）遺跡、土位（どい）遺跡があり、飛鳥時代から室町時代にかけての遺構や遺物がみつかっています。これらの遺跡の調査によって、野村町周辺に本格的に人が住み始めるのは、飛鳥時代（今から1,350年くらい前、土位遺跡）になってからということがわかってきました。奈良時代後半頃（1,250年くらい前）には、大規模な開発とともに人口も増え、集落も拡大していったようです。

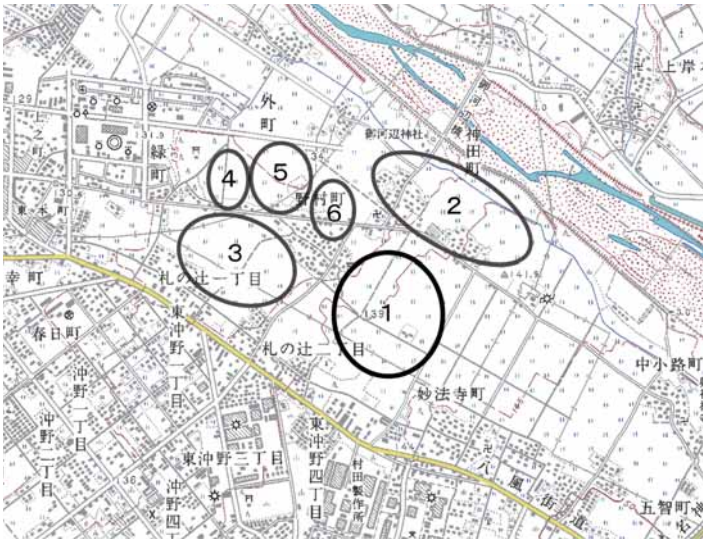


図1　金貝遺跡と周辺の遺跡

1：金貝遺跡　2：土位遺跡　3：野村遺跡　4：小山遺跡　5：野村北遺跡
6：陣屋遺跡

2．金貝遺跡の神社遺構

（1）三間社流造とは

金貝遺跡から三間社流造神社本殿遺構がみつかりました。三間社流造とは神社本殿の建築様式で、京都の上賀茂神社や下鴨神社に代表されます。全国的に分布し、神社の本殿建築としてはもっともポピュラーな様式です。特徴として、伊勢神宮の正殿や出雲大社の本殿のような掘立柱建築ではなく、井桁に組んだ材の上に柱を立てることがあります。これを土台建てと言います。この土台建ての建築手法は、神社建築でも賀茂の様式である流造（ながれづくり）と、奈良の春日大社の様式である春日造（かすがづくり）にしかみることができません。

流造と春日造の大きな違いは「平入り」と「妻入り」にあります。「平入り」とは、屋根が平らに見える側が正面となるもの、「妻入り」とは屋根が三角に見える側が正面となるものです。流造は「平入り」、春日造は「妻入り」となります。

流造の名称は、屋根が前面に向けて流れるように伸びていることによります。また、間口の数により、一間社・三間社などと呼びます。

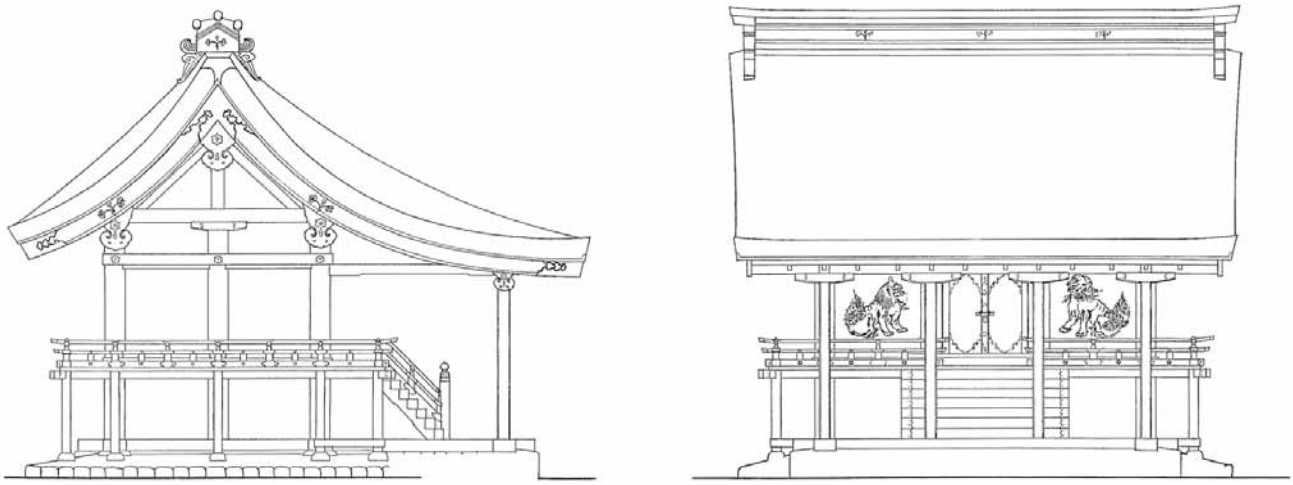


図２　上賀茂神社本殿

（２）金貝遺跡の神社遺構

平成 20 年度の発掘調査で、桁行（けたゆき）3間（６ｍ）、梁行（はりゆき）２間（4.1m）の身舎の南東側に１間（2.9m）の庇（ひさし）を持つ掘立柱建物が１棟見つかりました。これだけならごく普通の掘立柱建物ですが、この掘立柱建物には、一般的にみられる掘立柱建物とは異なる点が一つだけあります。それは、庇中央の２つの柱穴の内側に接するように一回り小さな柱穴があることです。

たいしたことではないように思えますが、この２つの柱穴の存在こそが、この掘立柱建物を三間社流造と推定する唯一の根拠なのです。これと同じような柱配置を持つ建物は、一般的な建物にはなく、三間社流造の神社建築にしかありません。

写真１　金貝遺跡の神社遺構

しかも!!　この神社遺構の大きさは上賀茂神社本殿とほぼ同規模になります。

この２つの柱穴は、神社本殿にある階段の親柱だったのです。

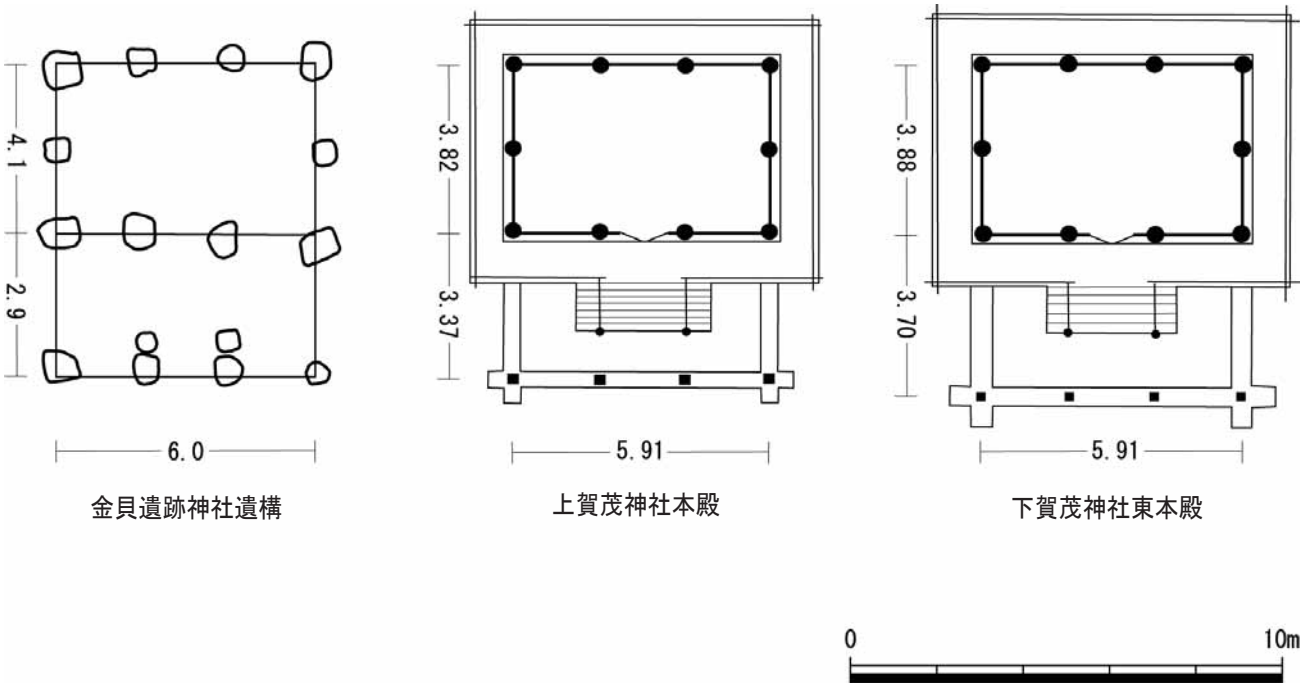
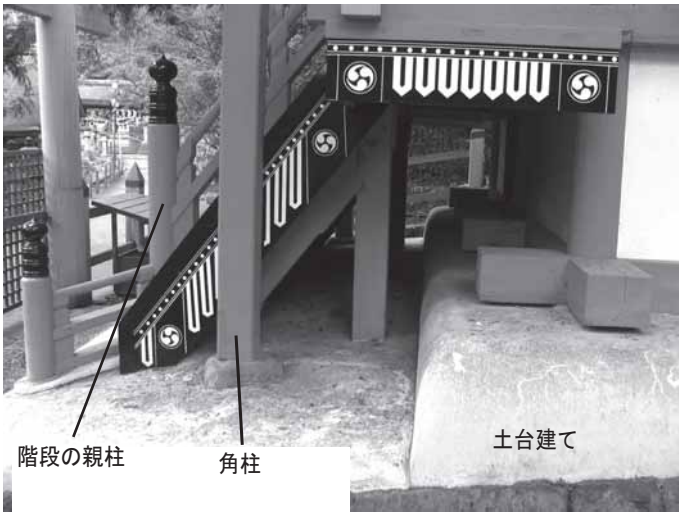


図３　建物平面比較



参考写真（春日大社境内社）

ただし、現在みられる流造本殿と金貝遺跡の建物には違いもみられます。まず、現在の流造本殿がすべて土台建てとなるのに対して、金貝遺跡の建物は掘立柱建物であること。一般的に流造では、庇の柱に角柱を用いるのに対して、金貝遺跡の建物の庇部分の柱痕跡は円形でした。また、身舎の周囲に巡る縁の痕跡が認められません。

（3）神社遺構の年代

みつかった神社遺構からは、年代を特定できるような遺物は出土しませんでした。そのため、周囲の遺構の状況から年代を考えなければなりません。金貝遺跡や周辺の遺跡で、飛鳥時代から平安時代にかけて多くの建物がみつかっています。これらの建物は、いろいろな方向を向いて建てられていますが、調べてみると、建てられた時期によって同じような方向を向く傾向にあるということがわかってきました。神社遺構の周囲からは多くの建物がみつかっています。もっとも近い位置でみつかっている建物群は、平安時代前期～平安時代中期のものですが、建物の方位がやや異なります。北側でみつかっている建物群は平安時代後期となり、これも方位が異なります。神社遺構と同じ向きとなるものは、南に 100m～ 150mほど離れた場所でみつかった建物群で、出土した遺物から奈良時代後半～平安時代初頭頃と考えられます。そのため、神社遺構の年代も奈良時代後半～平安時代初頭頃と考えられます。

写真 2　奈良時代の遺物

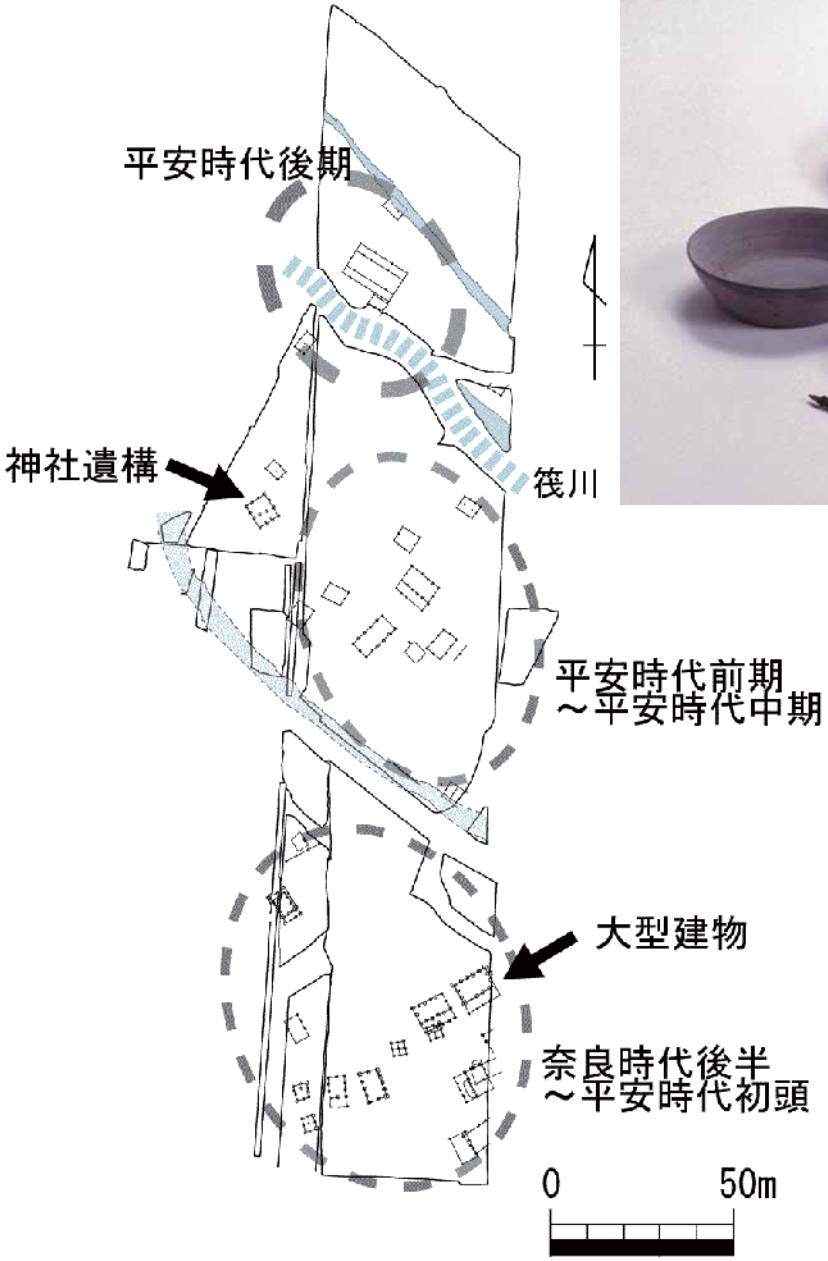


図 4　検出した建物群の位置と方位

３．神社遺構の性格

奈良時代後半から平安時代初頭頃、なぜこの場所に神社が建てられたのでしょうか。

そして、どのような神社だったのでしょうか。

①扇状地の開発、②灌漑（かんがい）水路、③荘園、④大型建物　この４つをキーワードに考えてみます。

（1）扇状地の開発

金貝遺跡が立地する野村町は、愛知川が形成した扇状地上にあり、地下水も深いうえ、礫がちな土壌で水はけがよいため、水田開発には多大な労力が必要となります。そのため、本格的に人が住み始めるのも遅れて、飛鳥時代を待たねばなりません。

まず、土位遺跡に飛鳥時代から人が住み始めます。土位遺跡は同じ扇状地上でも、金貝遺跡や野村北遺跡などよりも一段低い段丘にあたるため、比較的水が得やすかったのでしょう。そして金貝遺跡が位置する一段高い段丘上には、奈良時代後半になってようやく開発の手がはいったのです。

（2）灌漑水路

扇状地上を開発するためには、灌漑水路の開削が不可欠となります。金貝遺跡からもこのような水路跡がみつかっています。

写真３　水路跡

奈良時代の土器が出土しました。このような水路を掘って、灌漑を行ったのでしょう。

筏川（いかだがわ）と呼ばれる灌漑水路も注目されます。

・筏川は、別名「狛井（こまゆ）」とも呼ばれる。

・「狛の長者」が開削したと伝えられる。

・現在の筏川は、東近江市寺町で取水し、野村町一帯を灌漑し、箕作山（みつくりやま）南裾の小脇へと導水される。

・狛の長者は小脇あたりにすんでいたと伝承される。

・鎌倉時代以前には、東近江市寺町より下流で取水していたと考えられる。

・最初の取水口は駒寺（※土位遺跡は駒寺にある）あたり？

・狛の長者は駒寺にある高麗寺の信者であったと伝承される。

これら筏川にかかわる事実や伝承から、この地域の開発には渡来人が係わっていたのではないかと推測されます。「狛の長者」という人物が実際にいたのかはわかりませんが、この人物に仮託される有力者がこの扇状地上の開発を推し進めたのかもしれません。ただし、考古学的にはこの地域における渡来人の足跡も、古代寺院としての高麗寺の存在も確認されていないため、まだ憶測の域をでません。

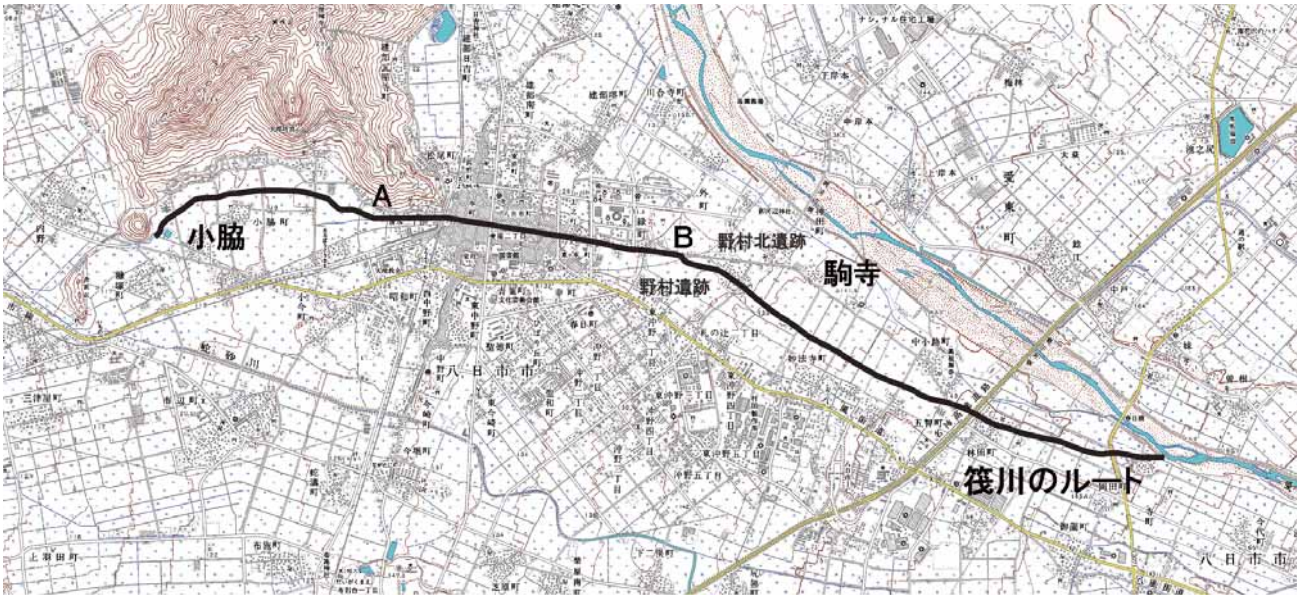


図5　筏川のルート

・A－B間の筏川は直線的なルートとなる。

・この直線区間の両端延長線上に、「駒寺」と「小脇」が位置している。

・この駒寺－小脇間を結ぶ直線が当初の「狛井」か？

（3）荘　園

747 年の『大安寺伽藍縁起並流記資材帳（だいあんじがらんえんぎならびにるきしざいちょう）』に「神崎郡柿御園荘（かきみそのしょう）一処」とあり、野村町を含むこの地域が大安寺の荘園であったことがわかります。大安寺は南都七大寺にも数えられる平城京にある大寺院です。この荘園がいつどのようにして成立したのかはわかりませんが、荘園の成立が開発を促進させたことは想像に難くありません。金貝遺跡に隣接する野村遺跡からは、奈良時代の鈒具（かこ：帯金具）や和同開珎を納めた土器が出土しています。出土した鈒具や和同開珎は大安寺の関係者、あるいは開発に携わった地域の有力者が持っていたいたものかもしれません。

写真 5　現在の大安寺

写真 6　鈒具（帯金具）

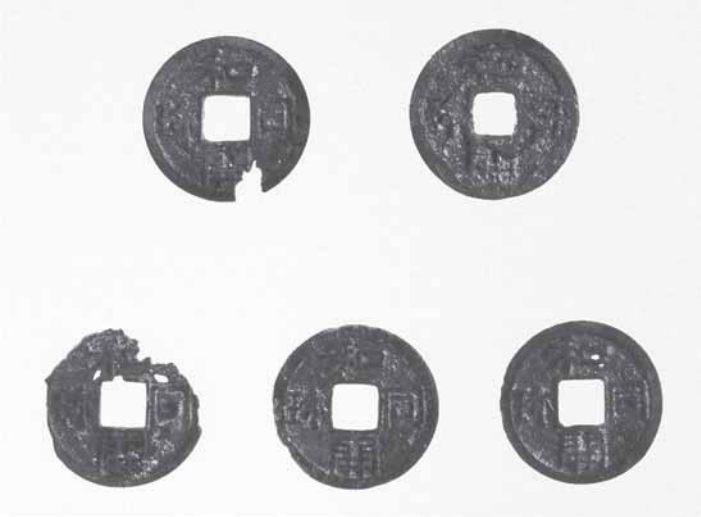


写真 7　野村遺跡から出土した和同開珎

明治年間に発見された。たくさんの銭が土器に入っていたと伝えられている。

（4）大型建物

神社遺構の南東約 150mの位置から同時期と考えられる大型の掘立柱建物２棟を含む建物群がみつかっています。神社遺構はこの建物群を向くように建てられており、両者には密接な関係があったことをうかがわせます。そしてこの大型建物は、開発に係わった人物や集団による中心的な建物であった可能性もあります。おそらく、この人物もしくは集団によって神社遺構は祀られたのでしょう。

写真８　奈良時代後半頃の大型掘立柱建物

以上のような状況から、金貝遺跡の神社遺構は、奈良時代後半にはじまる有力者主導による開発にともなって祀られたものと考えられます。同時にみつかった水路遺構の位置と性格をふまえると、水利に係わってこの場所が選ばれた可能性もあります。扇状地灌漑の生命線ともいえる大事な水路だからこそ、開発の成功と未来の繁栄を願い、すぐそばに神社を建てて祀ったのでしょう。

空間利用のあり方としては、祀りの主体となる建物群は南に、神社は北に位置し、神社は正面を南の建物群を向くように建てられています。お互いの距離は 100m以上あり、その間には灌漑水路が通ります。神社は本殿１棟だけであり、周囲には結界となるような区画もありません。周囲を空閑地とすることや水路をはさむことで清浄な地を造り出していたのでしょう。

４．神社遺構の問題点と今後の課題

（1）土台建てと掘立柱

現存する最古の三間社流造は、香川県神谷神社本殿で、建保７年（1219）のものです。また、流造としては、正確な年代は不明ですが、京都府の宇治上神社本殿が 11 世紀後半から 12 世紀のものとされています。今回みつかった神社遺構は、８世紀後半から９世紀前半頃のものと考えられることから、三間社流造とした場合、現存する本殿建築より 200 年以上も古く、流造の神社建築として確認できる最古の建築物となります。

そこで問題となるのが、土台建てと掘立柱の違いです。掘立柱の三間社流造は土台建ての三間社流造の祖形となるのでしょうか。それとも異なる系統のものがあったのでしょうか。

流造が土台建てである理由、それは遷宮（せんぐう）にあるといわれます。上賀茂神社の古記録によると、本殿の建て替えにあたり、旧本殿を取り壊す前に新本殿をあらかじめ建てておき、旧本殿を壊し更地にすると同時に、この新しい本殿を旧本殿のあった位置へすかさず引き動かして据え付けるのです。この移動のしやすさのため、流造は土台建てであるとされています。しかし、この遷宮も文献より確実に遡れるのは 11 世紀前葉までで、それ以前については不明です。土台建てが遷宮にともなって創始された建築様式であったとすれば、11 世紀前葉までは遡ることはできます。宇治上神社本殿も 11 世紀後半から 12 世紀とされるので、現況では 11 世紀より前の状況についてはわからず、土台建て以前に掘立柱による流造の本殿建築があった可能性は否定できません。いずれにせよ、金貝遺跡の神社遺構は、神社建築の歴史に一石を投じる発見なのです。

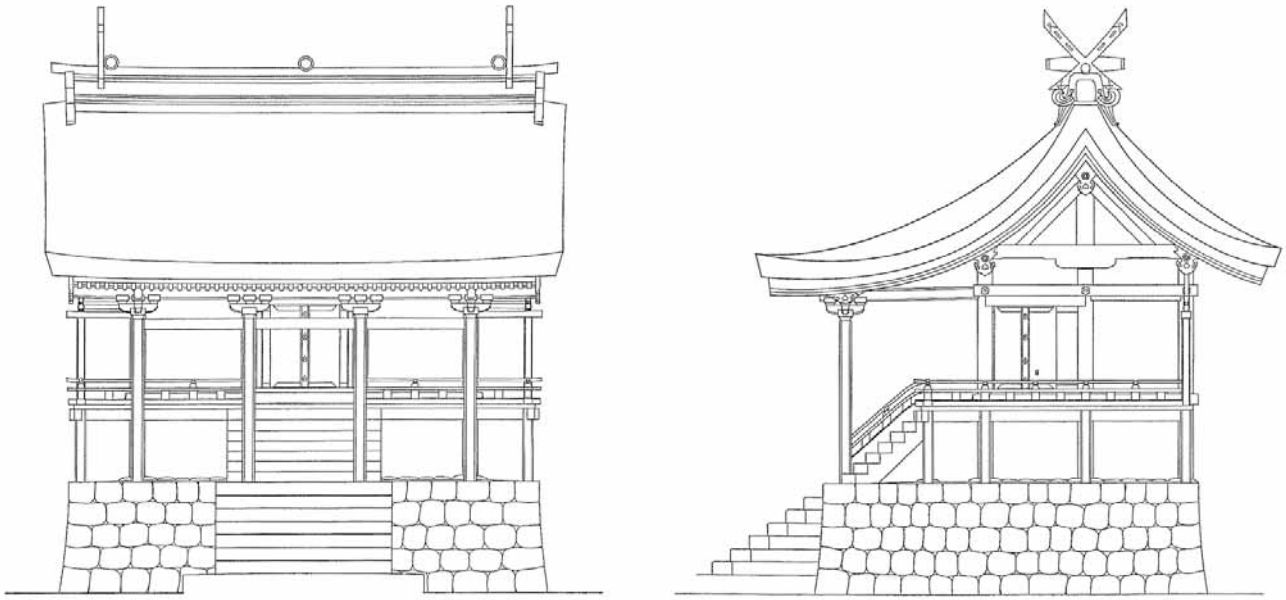


図６　現存する最古の三間社流造本殿（香川県神谷神社本殿）

（2）神社遺構は一時期だけの建物か

みつかった神社遺構には建て替えた痕跡はありませんでした。しかし、神社遺構の周辺からは、10 世紀以降も建物は作り続けられています。この頃には神社はなかったのでしょうか。３通りの可能性が考えられます。

①開発初期の一時期で廃絶した。

②他所へ移転した。

③掘立柱から土台建て本殿に建て替えたため、遺構としての痕跡をとどめなかった。

（2）神社遺構と周辺の神社

平安時代中頃（10 世紀前半）に法律の施行細則として編纂された『延喜式（えんぎしき）』という書物に全国の有力神社が国郡ごとに掲載されています。この『延喜式』に掲載されている神社のことを一般に式内社（しきないしゃ）といいます。近江国神崎郡には乎加（おか）神社と川桁（かわけた）神社の２社が記載されていますが、この川桁神社の候補の一社に金貝遺跡神社遺構の北約 700mに鎮座する河桁御河辺（かわけたみかべ）神社があげられています。神社名が似ていることから候補になっているのですが、河桁御河辺神社が現在の社名になったのは、明治 16 年のことで、それ以前には「三河辺大明神」とか「御川邊神社」などと称していたとのことです。そのため現状では式内社と断定することはできません。

しかし、境内には鎌倉時代の石灯籠もあり、それなりの古社であることはまちがいありません。また、愛知川のすぐ近くにあり、その名称からも水利に係わっていたであろうことが推測されます。

写真 9　河桁御河辺神社

また、金貝遺跡神社遺構の北西 100mには、八幡神社という小さな祠（ほこら）があります。この場所をよくみますと、発掘調査でみつかった水路跡の延長線が筏川とぶつかる位置に鎮座しています。水路跡と筏川が同時期に存在したのか明らかではありませんが、この神社も水利に係わって祀られた可能性もあります。これら周辺に鎮座する神社と金貝遺跡の神社遺構とは何か係わりあるのでしょうか。

今回、金貝遺跡でみつかった神社遺構は、三間社流造の唯一の発掘事例です。まだまだ不明な点も多くありますが、今後、調査事例が増加することによって、これらの問題点や課題も徐々に解決していくことと思われます。

「金剛般若波羅蜜経」のこけら経が出土

―高島市天神畑遺跡　全国初「見せ消ち」による誤字の修正例―

1．はじめに

天神畑遺跡を発掘調査したところ、遺跡の中を流れる大きな川が見つかりました。この川は、縄文時代から中世まで数千年もの間、川として機能していたのですが、江戸時代には埋まってしまいます。

この川の堆積層の中から平成21年2月に「こけら経」が出土しました。堆積層の時期は中世後半（室町時代）と考えられます。この「こけら経」が緩やかに流れていた川の中に納められたものと考えられます。

・時　　代　中世後半（15～16世紀）
・出土枚数　115点（断片や経典名不明のものを除く）
・形　　態　長さ298mm、幅21mm、厚さ1mm以下

文字が書かれていたのは、台ガンナで削りだした針葉樹の薄板で、薄いところは透けて見えます。写経は片面のみに墨書され、1行17文字を基本とします。同じ形状で下半部が欠損しているものが何枚もあり、中央部で束ねて納められたものと推測されます。

写真1　出土した「こけら経」
（『金剛般若波羅蜜経』）

2．こけら経

「こけら経」とは、経典を墨書した薄い板材（こけら）のことです（特定のお経の名前ではありません）。供養のため『法華経』などの経典を書き、一束にまとめ、川や池といった水に関する場所などに納めました。

今回、天神畑遺跡から出土した「こけら経」のうち、経典名が推定できるものが115点あります。このうち38点が『金剛般若波羅蜜経（こんごうはんにゃはらみつきょう）（略称：金剛般若経）』です。『金剛般若波羅蜜経』の出土例は珍しく、全国で3例目です。他の例は平成12年度に滋賀県草津市の柳（やなぎ）遺跡（14点）から出土した14世紀の例と、平成2年度に出土した愛知県清洲城下町遺跡の16世紀の例があるだけです。

『金剛般若波羅蜜経』は鳩摩羅什（くまらじゅう）訳の古い経典で、とくに中国の禅宗（ぜんしゅう）で重んじられました。日本に伝わる『金剛般若経』の多くは、中国から渡来した僧や中国の留学から帰国した禅僧らが書写したものです。中世の近江は、入元（げん）僧である寂室元光（じゃくしつげんこう）（1290～1367）が永源寺を開いて臨済宗永源寺派の祖となるなど、中国新来の仏教文化に特に敏感な土地柄でした。

近江出土の「こけら経」に『金剛般若経』が書かれていたことにより、中国仏教の強い影響が示されている可能性が高まりました。

今回、天神畑遺跡から出土の「こけら経」に記された経典は様々です。現在確認できているお経は、次のとおりです。

『妙法蓮華経』(69 点)

『金剛般若波羅蜜経』(38 点)

『梁朝傅大士頌金剛経(りょうちょうふだいしじゅこんごうきょう)』(3 点)

『摩訶般若波羅蜜経(まかはんにゃはらみつきょう)』(2 点)

『大般若波羅蜜多経(だいはんにゃはらみったきょう)』(1 点)

『法華経開示抄(ほけきょうかいじしょう)』(1 点)

『十二門論宗致義記(じゅうにもんろんしゅうちぎき)』(1 点)、

これらの中には、いままで出土例のない経典(『梁朝傅大士頌金剛経』など)が含まれています。ただ、今回は経名の検索を大正期に日本で編集された『大正新脩大蔵経(たいしょうしんしゅうだいぞうきょう)』所収の経典でおこないましたが、実際の経典は歴史的変遷の中でさまざまな「異本(いほん)」が多く存在します。『金剛般若波羅蜜経』の異本の中には、『梁朝傅大士頌金剛経』と全く同じ文言を含む写本が存在するのです。今回出土した「こけら経」は断片となっていますので、それがどちらの経典のものであるか断定するにはいたっていません。しかし、いずれにしても、一つの遺跡からこれほど多彩な内容の「こけら経」が発見されたことは他に例がなく、たいへん貴重な例といえます。

写真 2 「こけら経」の出土状況

3. 見せ消ち

出土した「こけら経」の中に、誤字を修正した例があります。この例では「他」と書くべき字を「佛」と書き間違えたので、それを修正するために、誤字の左側に、小さく間違いの印として「ヒ」と書き入れ、正しい文字を右側に書き加えていました。これは「見せ消ち」と呼ばれ、修正前の文字を確認できるように残す修正方法の一種です。このような修正方法は紙の文献の例は知られていましたが、「こけら経」において確認されたのは、この例が全国初です。

写真 3 見せ消ちのある「こけら経」

湖底で見つかった土器棺墓

ー志那湖底遺跡ー

遺 跡 名　志那湖底遺跡
所 在 地　草津市志那町地先
調査年度　昭和 59・61 年度
調査原因　琵琶湖開発事業（湖底浚渫・湖岸堤建設工事）

葉山川右岸の湖岸から湖底にかけては、上流から運ばれた土砂で三角州が形成されています。その高まりの上に縄文時代晩期前半（約 3500 年前）のお墓が見つかっています。お墓は現在の湖岸道路の下と葉山川河口から沖合い 400mの 2 か所で見つかり、この 2 か所をつないだ地点に帯状に存在していると推定されます。お墓の見つかった地点は標高 82.0 ～ 82.5m付近で、現在の琵琶湖の標準水面から 2 ～ 2.4mも深い場所になります。当時の琵琶湖の水面がかなり低かったことがわかります。

このお墓は土器棺墓と呼ばれ、縄文土器の深鉢や甕を利用し、遺体や遺骨を納めたものです。土器の大きさが直径 40 ㎝程度のため、大人の遺体をそのまま土器に納めることができないことから、子供の遺体や遺骨だけ埋葬したものと考えられます。

土器棺墓は湖岸で 2 基、沖合いで 3 基見つかりましたが、周辺にはさらに多くのお墓が眠っていると思われます。

当時の人々が琵琶湖に突き出した砂州の上にお墓を作ることで、死者の霊を水に流し、また来世での再生を願ったものでしょう。

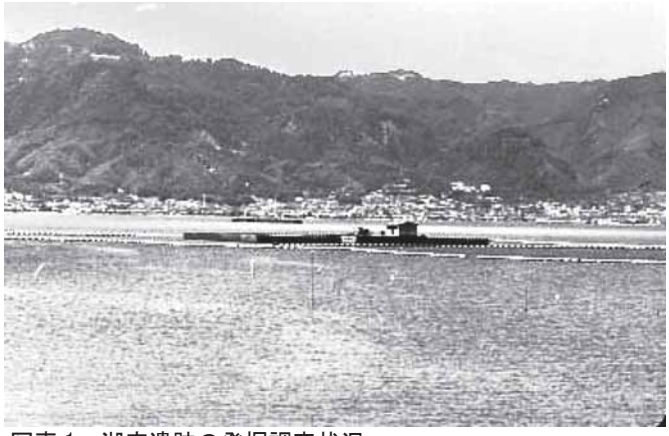


写真 1　湖底遺跡の発掘調査状況

写真 2　土器棺の検出状況

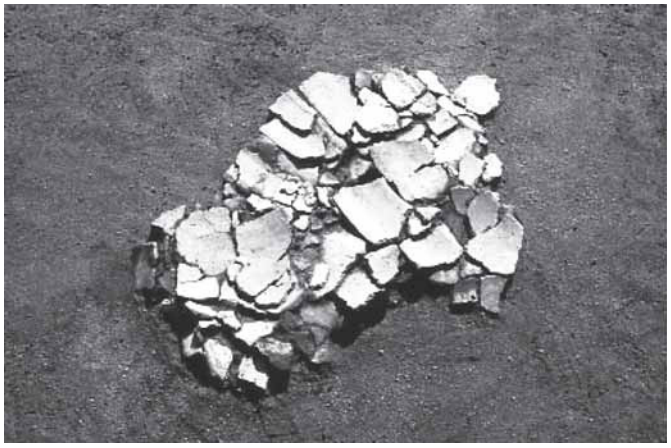


写真 3　土器棺墓（縄文土器・甕）

独鈷石（どっこいし）
―針江浜遺跡（はりえはま）―

遺 跡 名　針江浜遺跡
所 在 地　高島市新旭町針江地先
調査年度　昭和 62 年度～平成元年度
調査原因　琵琶湖開発事業（航路浚渫工事）

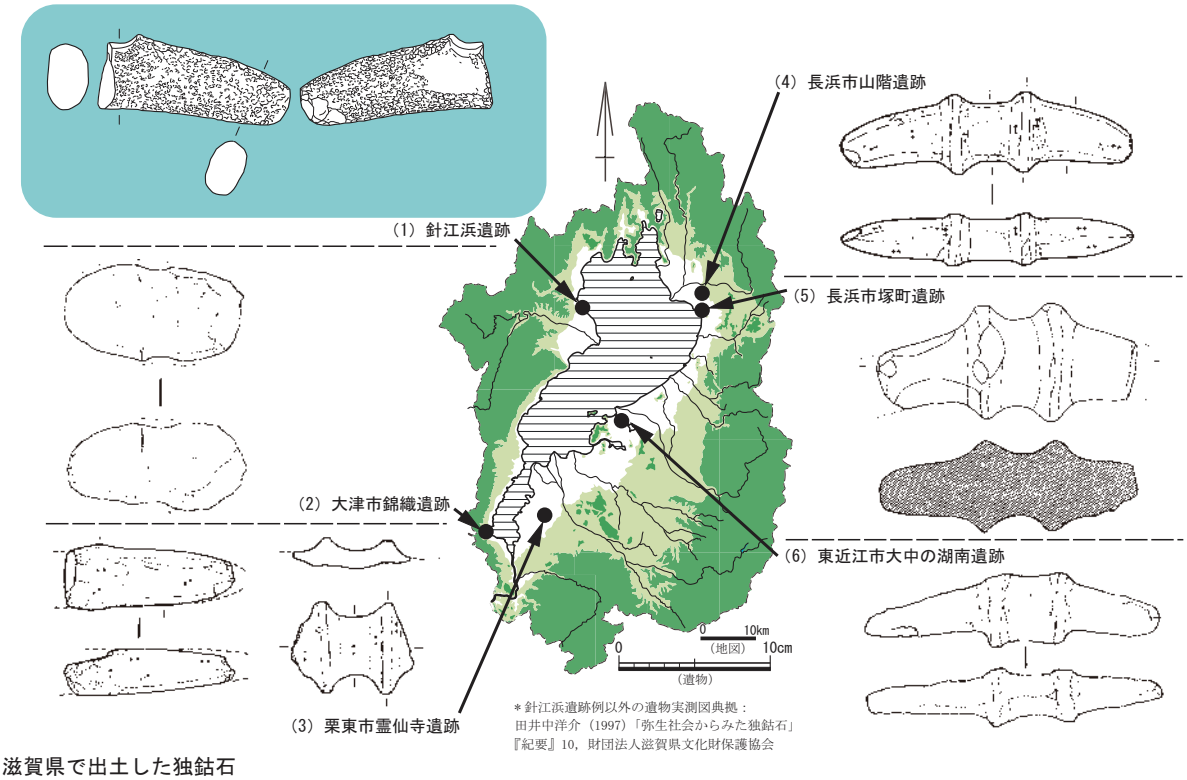
針江浜遺跡は，高島市新旭町針江地先の琵琶湖湖底にひろがる湖底遺跡です。

発掘調査の結果，縄文時代後期から古墳時代にいたる遺構・遺物がみつかりました。

今回紹介します「独鈷石」は，弥生時代前期頃の集落跡から出土したものです。独鈷石というのは，両端が細くなった棒の中央に二条の帯がめぐる形の石器です。縄文時代（後期・晩期）から弥生時代の初め頃の遺跡から出土します。

こんな名前がついたのは、密教の儀礼に用いる独鈷杵（とっこしょ）に形が似ているからです。しかし，独鈷杵は古代以降の金属器，独鈷石は縄文・弥生時代の石器ですから，両者は形が似ている以外に関係がなく，全く別物なのです。

独鈷石については，中央の突起部分の間に柄（え）を付けて，斧のように使ったと考える説もあります。しかし，実際に斧としての使用が考えにくい独鈷石の形を模した土製品が出土している例があるので，何らかの儀礼やお祭りに用いる道具であるという意見もあります。なお，滋賀県では，針江浜遺跡以外に 6 遺跡から出土しています。



滋賀県で出土した独鈷石

土馬（どば）
―関津遺跡（せきのつ）―

遺 跡 名　関津遺跡
所 在 地　大津市関津一丁目・五丁目地先
調査年度　平成 15 ～ 19 年度
調査原因　県営経営体育成基盤整備事業

関津遺跡では、縄文時代後期の落し穴、弥生時代後期や飛鳥時代の竪穴建物、奈良時代中葉から平安時代初頭の道路（田原道）と官衙（役所）、平安時代から鎌倉時代にかけての掘立柱建物、井戸、土坑墓、畠、室町時代の港湾施設、戦国時代から江戸時代初頭の区画溝（堀）などが見つかっています。

馬は、交通手段や労働力として利用されていましたが、同時に、神聖な動物とも考えられており、降雨祈願や止雨祈願の際に生け贄として神に捧げられました。奈良時代には、生きた馬を生贄（いけにえ）とすることが禁止されたため、粘土で作った土馬や木の板に描いた絵馬が生き馬の身代わりとして利用されます。

関津遺跡では、奈良時代中葉から平安時代初頭のものと考えられる在地型（写真・左）と宮都型（写真・右）の２種類の土馬が意図的に壊された状態で出土しています。土馬を壊す行為は、神に生贄として捧げたことを表現していると理解することができます。

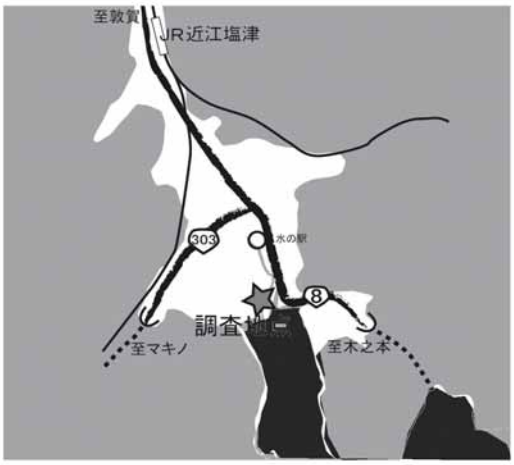
写真　関津遺跡から出土した土馬　祀りのさいに壊されたため、バラバラの状態で出土した。

塩津港遺跡のこけら経

遺 跡 名　塩津港遺跡
所 在 地　長浜市西浅井町塩津浜
調査年度　平成１８～２１年度
調査原因　河川改修

平安時代の神社跡として近年注目されている塩津港遺跡では、神社が終焉し、土砂で埋まってしまった江戸時代、そこには水のよどむ場所ができていました。そのよどみの中からこけら経の断片が数点出土しました。神社が建てられていた神聖な場所はその地形も変わり、供養の場所となった江戸時代の様子が伝わってきます。出土したこけら経はたいへん薄く、小さな断片となっています。書かれているお経などについてはこれから調査を進めていきます。

塩津港遺跡



塩津港遺跡出土のこけら経（江戸時代）

特別展示 滋賀県内出土のこけら経

滋賀県内では 11 か所からこけら経が見つかっています。このうち 10 例は遺跡の発掘調査で出土していますが、もう 1 例は石山寺の中興の祖である「淳祐内供像（じゅんゆうないくぞう）」の体内納入品です。

以下に、県内のこけら経の特徴をまとめてみました。

① 11 地点からの発見は奈良県の 27 例についで全国 2 番目に多い。

② 経典の『金剛般若経』は全国 3 例中、2 例が滋賀県で見つかっている。

③ 経典の多くは『法華経』である。

④ 遺跡からの出土地点は川や池跡など、水に関係する場所が多い。

⑤ こけら経の書かれた時代は室町時代が中心である。

このように、県内のこけら経は③～⑤など全国の例と同じ特徴もありますが、発見例が多いことや『金剛般若経』が多いことなど、滋賀県独自の特色もあります。

次に、今回展示する 6 遺跡について紹介します。

柳遺跡　草津市青地町

平成 12 年度の発掘調査で、水田をおおう 14 世紀末頃の洪水砂の中から見つかりました。14 点のすべて『金剛般若経』です。この『金剛般若経』の出土例は平成 2 年出土の愛知県清洲城下町遺跡に次いで 2 例目です。

北萱（きたがや）遺跡　草津市矢橋町

昭和 59 年度～ 62 年度にかけての草津川改修工事に伴う発掘調査で卒塔婆（そとば）と『法華経』を記した 3 点のこけら経が見つかっています。

国領（こくりょう）遺跡　彦根市田附町

平成 15 年度の調査で溝から 316 点のこけら経が出土しています。その内 36 点がつながり、経典が判明しました。書かれた経典はすべて『法華経』です。

写真　出土したこけら経
（左・中：柳遺跡、右：国領遺跡）

大宮遺跡　守山市欲賀町

平成元年度の調査で室町時代の河跡から 31 点のこけら経が見つかっています。ほとんどが『法華経』です。この河跡からは、こけら経のほか物忌（ものいみ）札・題目札・卒塔婆（そとば）・人形（ひとがた）・木像などが出土し中世の信仰を考えるうえで参考になります。

天神畑遺跡　高島市鴨

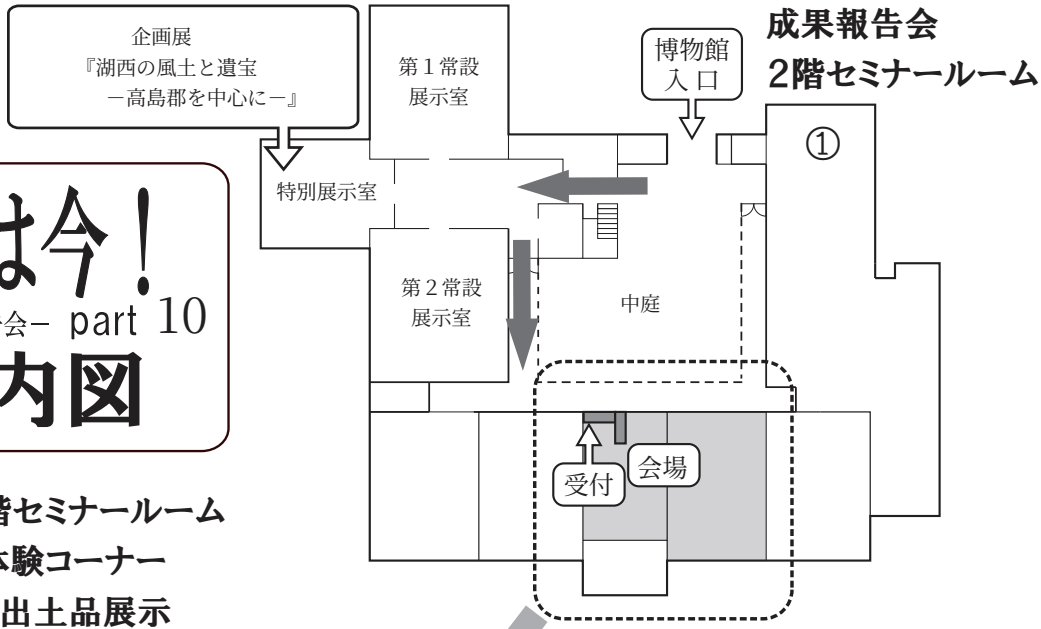
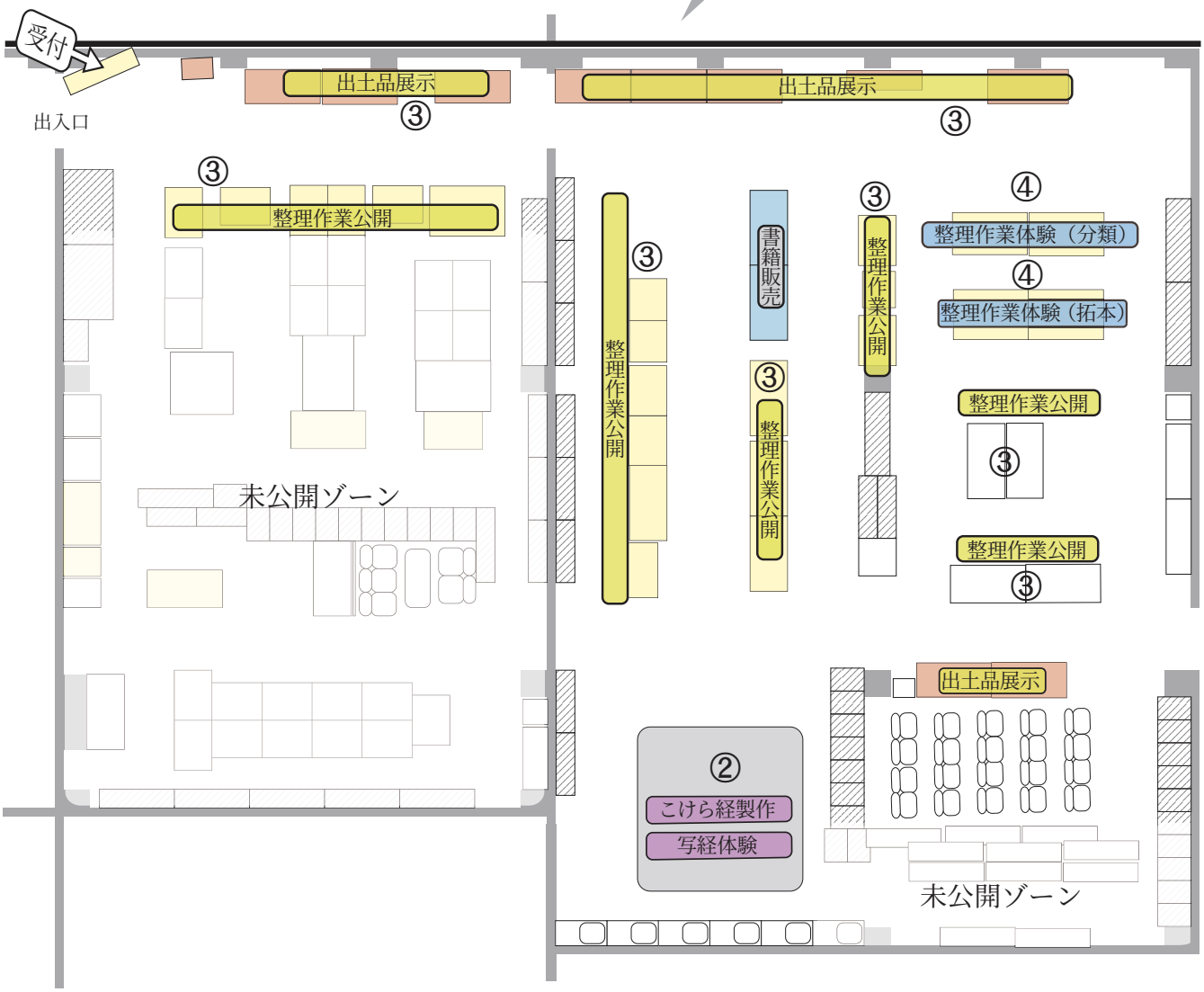
平成 21 年２月の調査で、室町時代の河跡から 115 点のこけら経が出土しています。その内 69 点が『法華経』で、全国３例目となる『金剛般若経』が 38 点のほか、出土例のない経典など合わせて７種類の経典が見つかっています。また、誤写した経文を訂正をした「見せ消ち」のあるこけら経もあります。

塩津港遺跡　　長浜市西浅井町塩津浜

平成 18 年度からの調査で『法華経』を主に約 34 点のこけら経が見つかっています。

表　県内こけら経一覧

遺 跡 名	所 在 地	出土遺構	点 数	経 典	時 代	備 考
柳遺跡	草津市	洪水砂	14	金剛般若経	室町初	
北萱遺跡	草津市	河？	3	法華経	室町？	
大宮遺跡	守山市	河	31	法華経	室町	
光明寺遺跡	野洲市	溝	10	法華経	室町	
慈恩寺遺跡	安土町	池	379	法華経	鎌倉～室町	校正あり
国領遺跡	彦根市	河	約316	法華経	室町	
浄琳寺遺跡	彦根市	沼地？	約1870	法華経	不明	
小谷城跡	長浜市	池	114	法華経	室町末	
塩津港遺跡	長浜市	溝	約32	法華経ほか	江戸？	
天神畑遺跡	高島市	河	115	金剛般若経/法華経	室町	見せ消ち
石山寺	大津市	像体内	22	不明	室町	笹塔婆

あの遺跡は今！
－埋蔵文化財整理調査成果報告会－ part 10
会場案内図

①調査成果報告会　2階セミナールーム
②こけら経製作・写経体験コーナー
③整理作業特別公開・出土品展示
④整理作業体験コーナー